

報



會

會 岳 山 本 日

50

月 十 年 十 和 昭

尾瀬水電と富士
ケーブルカーの
問題

尾瀬沼、尾瀬ヶ原の水力發電問題は、大正十年代以來の問題であり、當時農林當局は、武田、田村兩博士に同地域の調査を依頼し、我が國の自然財産として如何に此の地帯が國寶的存在であるかを天下に明にした。又文部省では最近に至り同地域に對し天然記念物指定を行ふ旨内定したと傳へられる。

然るに、尾瀬ヶ原一帯で水力發電計畫を有してゐた東京電燈會社では右指定が確定的となれば、水力工事に重大支障があると云ふので、現に内務、逓信省から水利權を賦與されてゐることを理由に右天然記念物指定に反對し、當局に陳情してゐると九月十二日附の東京朝日新聞は報道してゐる。

同じく東京朝日新聞は右報道の前日即ち九月十一日左の如き富士山ケーブルカー計畫なるものを報道した。右計畫に従へばケーブルカーは五合目で地面に出る以外は全部直徑十六米のコンクリートの隧道で地面下四十米の所に埋められると云ふのであるから風致は決して害さないといふ振込みである。

日本山岳會がかゝる問題に重大關

心を有することは今更ら説明する迄もない。我々が一電力會社やケーブルカー計畫者に對し何等かの遺憾がありやう筈はない。併し、一企業のために天下の風致が見す／＼破壊される事を拱手傍觀してゐる譯には行かない。我々は四十萬キロワットの電力よりも、居乍らにして富士山頂に達する安樂さよりも、懸け代へのない自然の保存を尊重するものであり、且又、國家百年の計に立てば當然斯く考ふべきものと確信して疑はないのである。産業の發達に寄與するとか科學的研究に資するとか云ふ遁辭の下に今日迄如何に多くの自然が破壊されたかを熟知する我々としては、此の決意は餘りにも當然の結論である。本會としては九月十月の再度互る理事會に於いて方針を決定、此の問題の満足なる解決の爲めに全力を擧げて努力すべきを決意し直ちに夫々活動を開始した。

本會としての主張が尾瀬、富士に限定されたものでないことは論ずる迄もない。併し、此の問題について我々がその主張を貫徹するか否か、將來に如何に重大關係あるかを考へる時、我々はその責任の重大さを意識せざるを得ない。

自然の破壊、無統制な機械文明の自然界への侵入に對しては、我が日本山岳會は斷然反對であると云ふ一事を此の機會に天下に表明し幟旗を明にして置くことは望まじきのみならず、當然の義務でもある。

富士山ケーブルカー反對

小 島 鳥 水

昭和十年九月十一日の東京朝日新聞に「富士山特急征頂、モグラ式ケーブルカー計畫」と題して、富士山の横ツ腹に、大穴を明け、山頂まで鑿道をつくり、登山者は、坐つたまゝで山頂へ運ばれるといふ大ケーブルカー敷設が計畫され、許可願ひが、既に計畫者から、山梨縣廳を経て、近く鐵道省に提出されると報道され、出願者の説明として、山梨縣の吉田口を起點とし、富士の横腹に入口の大穴をあけ、山麓から山頂まで直徑十六米位の、コンクリート隧道を作り五合目の山腹で乗換所を作り、途中下車をさせて觀光気分を満喫させ、更に山頂まで運び上げるのに、所要時間は、大したスピードも出さずに四十分位で済む見込み、車は一臺八十人乗りの、流線型を使用するとして、總工費は五百萬圓足らず、乗車賃は一人往復五圓として吉田口からの登山者毎年十萬人を下らぬから、十分の採算が出来る、とある。

右に對して、内務省衛生局の見解として、ケーブルカー敷設に同感出来な、國立公園の見地からも、その計畫に賛成されなといふ、簡單ながらも、反對説が出てゐた。

然るに同紙上九月十九日より三日間にわたり、辻二郎氏は「富士山のケーブルカー」と題して、何といふ結構なことだらうと、全幅的賛意を表し、内務省が「感心出来ぬ」といふ意見で、二度びつくりしてしまつたさうであるが、私は辻氏の賛成説を讀んで、三度びつくりしてしまつた尤も議論には、大分からかひ氣味の茶目があるやうで、それに釣ひ出されて、肩臂を張るのもどうかと思ふが、私は富士山ケーブルカー敷設には、斷乎たる反對説であるから、以下それを述べる。

日本を、廣い意味から一つの郷土と見れば、郷土中の山といふ山の光は、富士山である、海内最高の峰であるばかりでなく、總合自然の一個體として、美の累積があり、複雑なる自然錯綜の中に統一があり、豐饒無限の充實した力を保有してゐる、その齊整、調和、統一の、端嚴美妙なる姿相は、人間の手で塑造したものでなく、人間の刷毛で色彩を塗抹したからでもない、劫初以來、生れ出たまゝにして、美なるものである、これは人間の利害得失を土臺にして、言つてゐるのではないと共に、富士山も、人間の利害得失を對照として存在してゐるのではない、富士山は富士山にして、人間は人間である、言ひ換へれば、富士山の存在は、そのものだけで絶體である。だが、富士山から美を見るのも、

力を感得するもの、人間である。富士山自らは、素より美醜を關知しない、こゝに自然（富士山）と人間の相對性が繋がる。人間は（こゝでは、勿論日本人を言ふ）未だ審美學などの成立しない前から、富士山に魂を打ち込んでゐた、富士山の美に恍惚としてゐた、その頃は一般に山岳及び森林の崇拜が起り、殊に山岳の如きは民族的信仰の淵源となつた。既に民族的と言ふからには、一個人の趣味教養の範圍に止まらず、もつと根本的で、普遍的なものである。たとひ今日から見て、その山岳信仰は、單純幼稚なものであつたかも知れないが、淵源は深く遠く、山岳に緣る淨穢の觀念は、數千年來、日本人日常生活の儀禮ともなり、日本人の性格を陶冶して來てゐる。換言すれば、日本人の信仰と生活には、祖先以來連續として山岳の影が著るしくしてゐるのである。歐洲アルプスに、或は歐米人に、一つでもそれに似た例があるか。日本では、神道にしろ佛教にせよ、或は又修驗道にせよ、學問にせよ、或は一個人の精神上的感應應驗にせよ、昔から山岳から受けたところの恩恵は、恐らく他の國民に、比類の無いものである、殊に富士山に於ては、一個の山といふよりも、神化された天上の淨土になつてゐる。今から一千二百年も前の、萬葉の詩人が「日の本のやまとの國の、しづめともいふ神かも、寶ともなれる山かも、駿河なる不盡の高

根は、みれどもあかぬかも」（高橋蟲麿）と詠んだ絶唱は、やはり現代の我々の胸にも、響く言葉である。併し今日は、宗教の衰頹時代であるから、假に信仰の富士が人民から忘られたとしやう（事實はさうで無いが）だがそれとしても富士山の美くしさだけは斷然残る。この純美なる名山が、我等の郷土日本に與へられたのは、前述の如く、人間が築造したものでないから、天授の國寶、自然の藝術品として、我々に與へられたのである。我々は、朝夕富士に向つて愛慕の念を抱くと共に、富士山を汚損せず、天授の不朽なる國寶を保護することを以て、我々の、當然守るべき任務としなければならぬ。故に我々は、人間の利益觀念から打算した富士山ケーブルカア架設といふ如き、請願に對して、斷乎として反對しなければならぬ。登山者の足勢を省くとか登山者の數を多くするとかいふ如きも、利益觀念の一つの現れであつて、人間の居住地なる都會村落に於ては、便益第一主義が許さるべきものであつても、一萬二千尺の高峰にして、且つ民族的信仰の名山、自然崇拜の道場に於ては、便益第一主義の上に、超然として、守るべき聖美は、身を以て之を守らなければならぬ。「美は世界を救ふ」とはドストエフスキの言である。猶太人すら猶且つ之を唱ふ日本の自然の聖母ともいふべき富士の裸體に對して、横ッ腹に大穴を明けたり、

醜き鐵道の蚯蚓張りを拵へたりすることは自然の聖母の身體美を毀損する行爲である。我々は自然兒たる日本國民の一人として、不孝の兒たることを忍びない。ケーブルカア賛成論の勇者辻二郎氏の教示に依れば、靈驗あらたかなる淺間神社へは、足の強い、體力の旺盛な人間だけしか、參れないといふのは、神の御恩召とは思へない、老人でも、婦人でも、信仰あるものは、皆參れる様にする方がよいと思ふ、何でも歩いて行かねば不敬に當るといふ事なら、伊勢參宮には、東海道を、藤栗毛、興津蒲原を、てくてくと、大井川は肩車で渡らねばならぬ（中略）乗物に乗つても、神怒に觸れない證據は、高尾山や比叡山が、先鞭をつけて居られる。

この引例は頗る當らないと思ふ。富士山鐵道架設に、反對の私ではあるが、富士に參詣するには、必ず小佛峠を徒歩で踰え、桂川を人夫の肩で渉り、吉田の大鳥居の下で、水垢離を取れなど、は言はない。随つて伊勢參宮は、東海道を徒歩で歩かねばならぬとは思つてゐない。伊勢大廟のことは申すもかしこし、神社佛閣には「皇族下乗」といふ立札のあることを、辻氏は知つて居られるだらう。皇族の尊貴を以てすら、御徒步を遊ばれることが、神佛に對する敬虔と儀禮になつてゐる。平地の神社佛閣でさへも儼然たる境界線がある。富士淺間神社の奥の院は、官弊大社として、絶頂に鎮座してゐるが、そこまで行かずとも御殿場、須走、吉田、大宮等の諸登山口にあつて、其中には兩宇壯麗をきはめ、保護建造物に指定されてゐるものもあり、信仰者の參拜も、そこで敬神奉賽の目的は達せられてゐる。奥の院の頂上迄、鐵道架設行爲に依つて、山體を毀損してまでも弱體なる老人小兒等を運搬することは、利益を數でこなす資本家の御恩召には協ふであらうが「神の御恩召とは思はれない」と、シツペイ返へしをしたくなる、況んや「乗物に乗つても、神怒に觸れない證據は、高尾山や比叡山が、先鞭をつけてゐる」とは、神佛を愚弄した言語である。恰も神體佛像を足蹴にして見たが、未だに足が曲がらない、といふ放言と同一である、神怒に觸れるとか觸れないとかいふ問題よりも、聖地の毀損が、いゝ行爲であるか否かを、自ら内省すべきはあるまいか。殊に唯一の靈峰富士山に對しては、これから辻さんの、ケーブルカア主張説を検討することにしやう、辻さんは先づ曰く「ケーブルカア等と云ふハイカラな物になると、機械文明の先進國の例も、一應は考へて、他山の石となすべきではないかと思ふ」と、單獨にケーブルカアだけに係はる問題なら、さうかも知れないが「富士山にケーブルカアを架ける」といふ問

題は、機械文明の先進國の例など、一向ありがたくない少なくとも富士山にケーブルカアを架するといふ企劃そのものに頭から反對してゐる我々は、機械文明の先進國の例などは、むしろ有害として排斥こそすれ、他山の石などしやうとは思ひも寄らない。他山の石といふ言葉は「他山の石以て玉を攻くべし」といふ意味であるが、富士のケーブルカアは「他山の石以て玉を傷つくべし」であるから、我々の極力憚忌する所である。しかも辻氏の引例を拜見すると、ユングフラウの登山鐵道や、モンブランの空中索道のことが、あるが空中索道に至つては、日本でも黒部川の籠渡し、越中飛騨國界の籠渡しなど、昔はあつた、勿論堅牢性に於て、アルプスのに及ぶべくもないが、それは始めから使用の目的が違つてゐるのだから、暫く別問題とする、ユングフラウの登山鐵道類似的着想は、寧ろアルプス風景を俗化惡化したものとして識者の警告を受けてゐるくらゐである。一例を舉ぐれば、我が學界の耆宿、天然記念物保護の首唱者、三好學先生は、今から二十年前（大正四年）の著書「天然記念物」に於て、左の如く論ぜられてゐる。

適當なる美化（私註、人爲的のもの云ふ）は、名所の保存上に必ずしも不可ではないが、其程度と方法を誤ると、俗化に陥るから、注意しなければならぬ、市

街は十分に美化し、便利にする必要があるが、山谷の勝を集めた勝地では、矢張山は山とし、谷は谷としての、自然の風致を、保たせなければならぬ、山や谷まで、都會の如く、便利にし、美化し（人爲的に）但しは俗化してしまふには及ばぬ、全體美化と保存の別は歐洲などでも、動もすると誤解する虞があるから、コンツェンツ氏の如きは、特に之に就いて注意し彼の米國等でも用ひられる「國設公園」の如き言葉を避けて「天然保護區域」と云ふて居る（中略）都會の人々は、地方へ旅行して、高山に登り、幽谷に入り、立派な山林奇麗な原野を見て、始めて天然の美觀を知り精神の保養になる、若し是等の場所が美化し、俗化してゐたならば、應々山中へ行く甲斐は無い、將來我邦に於て、各地に名勝保護區域を造る場合は、能く此點に注意して、美化に過ぎ、俗化に陥ることの無いやうにしなければならぬ。（同書一四二・一四三頁）

歐米諸國で行はれて居るからとて、彼の名勝地に見る所の計畫を其儘我邦の場合に實行することは、得策ではない。我邦では我邦の山水風景を損ぜぬやうに、設計を施さなければならぬ名勝保護區域を作る場合に於ては、地點は篤と注意を要することであらう。（同書一六六頁）

二十年以前の老博士の説をして、先見の明を誇らしむるものは、今回の亂暴なる富士山ケーブルカーの問題に如くはない、アルプス數百峰の中に、ユングフラウの山に登山鐵道が架かつたからと言つて、何故皇國第一の靈峰なる富士山に、ケーブルカーを架けなければならぬのか私は敢えて一部の學者の口吻を真似るのでは無いが、金匱無缺の國體を有し、遠く神代の昔から傳はつて來た、美しい國土の代表的名山、しかも過去二千餘年の間、我國人憧憬の的となつて、古くは萬葉の詩人をして「あめつちのわかれしとき少、かみさびて、たかくたふとき」と禮讃させた富士の高嶺、近くは明治の詩人北村透谷をして「自由汝と共にあり、國家汝と共にあり」（中略）是より風流の道大に開け、人磨赤人より、降つて西行芭蕉の徒、この詩神（富嶽の詩神を謂ふ）と追遙す、（中略）詩神去らず、この國は愛すべし詩神去らず、人間なほ味あり」と禮讃せしめた富士山を、第十八・九世紀頃に開けたアルプス連嶺中の一峰、

ユングフラウなどと同一視することゝが妙なくとも日本民族の傳統と、文化精神に於て、許されと思ふか。そしてユングフラウなどに登山鐵道が架つたからと言つて、富士山にも同様にやつたらどうだらうと言ふに至つては、機械文明の先進國を崇拜するの弊も亦極まれりと言ふべしである。況んや機械文明の先進國と雖も、例へばアルプスにしても、第一流の高峰に必ずしも、登山鐵道が架つてゐないのみならず、偶まその企てがあつても、世論の反對激しく、展息してしまつた例があるに於てをやである（松方三郎氏の別文参照）。

現に米國の如き資本主義國、金力萬能國に於ても、ラッセン火山國立公園、レイニーア國立公園（孰れも富士山に類似した火山の國立公園なるが故に舉ぐ）に、未だ登山鐵道を架けるなどいふ企てを、全然聞いたことが無い、又辻さんは、三千里突の高所へ鐵道を架けないから、我國の資本家や、技術者が、腰抜けだと云はれても、申し開くべき實例が無いのは、残念だとか、山へ登ることを知らなかつた人も、ケーブルカーのおかげで、三千七百米の所へ立つて六十餘州を眺め渡したら、どんな氣持がするだらうなどいふ、マルで資本劇場の札賣場に立つて、公衆に「入らつしやい」をまくし立て居られる如くに聞えるが、これは冗談であらう、富士山の上に立つても、六十餘州が一と目に見渡せるわけの

ものでもないし、三千里突へ鐵道を架けないからと言つて、日本の資本家や技術家を、腰抜けと思ふ人も無からうではないか、今日の工業日本を成したのは、彼等の力である。只だ富士山に鐵道を架けないといふ一事で腰抜け呼ばれり言ふは堪まらないが假にそれが腰抜けであるとしても、本邦唯一の名山富士山を犠牲とすることに依つて、腰抜けの汚名を雪がせるとか、又は腰抜けと詬罵することに依つて、ケーブルカー敷設を促成するのが、辻さんの意圖であるならば、私は彼等が永久に腰抜けであつてくれと一向差し支へがないと思ふ。

又辻さんは、鐵道が出来たら、高層氣象の完全なる觀測所が出来るとか、重い機械が運べるとか航空燈臺も建設されるとか、種々學術上の附帶利益を擧げられてゐるが、これも比較上の程度問題で、もしケーブルカーが完成しなければ、是等の事業が一切成り立たないとも言ふならば、辻さんの口吻を拜借して、日本の學者は腰抜けだと言はれても申し開きが出来ないと思ふが、事實はそんな、絶對的なものでは無いと思ふ。

併し萬一、然り萬々一、ケーブルカーが架からないから、是等の學者たちが手も足も出ないと言ふなら、私は呼ぶであらう。學術の名を以て富士山を汚さんよりも、富士山の純潔を保つために學術よ、去れ、何と

なれば、多くの天然記念物保存事業は學術のために、爲されてゐる筈であるのに、今回の富士山の場合に限りて、學術は、天然記念物を破壊せんとするが故に」

山岳圖書展覽會目錄別冊

定價 並製金五十錢也（四錢）
上製金壹圓也（送料）

「山岳」合本用表紙

- 一、上質バックラム（灰青色）
- 二、背、山岳第何年西曆を押す
- 三、ピラは兩面に會章を押す
- 四、前後見返し茨木畫伯筆
- 五、一分合本用表紙のみを所要の場合、五十錢（送料本會負擔）
- 六、雜誌を本會へ送付され製本料共一圓（返送料本會負擔）

會報綴込用表紙

- 一、ピラは濃綠色レザール、會章押捺
 - 二、背は濃紺色クロス
 - 三、代金四十錢（送料本會負擔）
- 御入用の方は振替又は小爲替にて御申越下さい。
- 振替口座東京四八二九番

風景地の保護と國民の自覺

武田久吉

明治の維新以來、歐米文化の吸收に傍目も振らず邁進した新興日本は二十世紀に入つてから、更に飛躍を重ね、忽ちして世界一流の國家に伍して遜色なき迄に達したが、それは遺憾乍ら外觀のみの事であつて、聊か手厳しい比較ではあるが、腦水腫の不具者が瞥見補助に似たも同然で頭許り大きくて、脚は不釣合に貧弱な發育を成してゐるやうなものである。例を他に取れば、大福餅か稻荷鮓のやうに中の身と外の皮とは甚しく異つたもので、羊羹やカステラの如く、ホモチニアスなものである。

蓋し現代日本の文化は、結局附焼又同然なもので、日本の國土に芽萌えたものではなくて、外部から注入し、蔽蔽したのであるから、徹頭徹尾日本的であるといふ譯に行きかねる。その例を、吾人は日常餘りにも多く見つけられて、實のところウツザリしてゐるのである。

何れの方面を問はず、その現れの到る處に見られることは、諸君も先刻御承知のことに相違ない。

然らば、外國文化の吸收は悪いことかといふに、決してそんな譯なものではない。海外から文化を輸入しなくして、悉皆これをスポンテニアスなのに俟たうとすれば、どんな

國でも、他の列強よりは一步も二歩も、或は數十歩も、遅れてしまふのが、現代に於ける世界の情勢である。敢て我が帝國に限つたことではない。

生物は如何なるものでも、外國の状況から常に多大な刺激を受け、それにして何等かの反應を示すものである。處で、生物の一員である人類が、國家を構成してゐる以上、國家も亦一つの生物體と見做すことが出来る。因つて、これは常に外界からの刺激を受けるものであり。そしてその刺激から絶縁し得るものではない。文化が向上すると否とは、一國が他から受ける刺激の種類と、それに對する反應の如何によつて定まると見て宜しい。常に良い刺激を受け、それに對して良い反應を示すに於ては、文化の向上の期して待つ可きは當然である。

然るに得手勝手な人間は、内部の反應が、先づ外部の刺激に因り現れたことを忘却し、反應の顯れを、獨自の發明に係るものやうに誤解し刺戟を斷たうと試みたり、甚しい場合には、嘗て受けた刺戟をも、之を外來のものであるの故を以て、排撃しようとするときへ見られるのである。彼の排外思想の如きはその一例であつて、本末を辨へない徒の、哀れむ可き短見に他ならない。

假に日本から、外來物を盡く排除したとすれば、吾々は日常の最もモダストな生活をさへ續けることは出来ない。考へても見給へ、穀類、豆類、野菜等の重要食品は、悉皆外來の植物であつて、日本の野生種の何れをも改良栽培したものではない。その他纖維植物の重要なもの亦皆然りであるから、忽ちして衣食に窮してしまふのは當然である。厚司を繼ひ、魚介を漁り、野生の貧弱な果實のみによつて生活しなければならぬといふとすれば、如何にして東亞の大強國の體面を保つことが出来やうぞ。更に一步を進めて、外來者を悉く驅逐するとすれば、大和民族は須く國外に去つて、潔く先住民族に國土を明け渡さなければならぬことになる。

元來島國といふものは、海によつて大陸から隔離されてゐるが爲めに外からの刺激を受ける機會が少くとかく世界の大勢から置去られ勝であるが、近來のやうに交通や電波利用の途が大きな進歩を示して以來、大陸と大差ない狀態となつた。従つて各種のものが、求むると否とに拘らず、毎日毎時渡來して、それが刺戟となるのであるから、それをよく選擇取捨することが必要であるのは敢て言を俟たない次第である。

對に必要である。自己を知るの明なくしては、事物の取捨選擇を誤る可きは理の當然である。それにも拘らず、人間はとかく自分を顧るを後にして、他人のことを氣にし勝ちなものである。隣人の財産や収入を算へるに急であつて、己れの財産の輕重を忘れ易い弊がある。更にまた、他人の所有品を羨望し、自己の性質を輕視する傾向がある。

日本の知識階級は、多年この弊に陥り容易に、それから脱却し難い狀態にあることは、國家的見地からして、實に莫大な損失と言はなければならぬ。能く世界の趨勢に通じ、他國の行動を品臨する人は少くないが自國に對する認識に於ては甚しく貧弱であるやうに考へられる。殊に我が國土の本質を細かく檢討することは、一般に甚しく忘れられてゐる。

その結果として、外國文化の無批判的輸入は絶えず行はれ、國土に適すると否とに拘らずして、とかくそれを實行に移さうとする努力が試みられることは、遺憾千萬である。勿論我國の文化は古來輸入品である。文化を舶來に仰ぐは結構であるが、それをよく咀嚼同化し、我が國土に適するやうにして始めて意義があるので、消化不良の文化の瀾漫終始末に終へぬものはなく、國家に毒害を流す外何の得る處も無い。

の住民が、都會の空氣にあこがれて祖先以來開拓した郷土を捨ててゐるのも一半はこの性質にあるに因るので、己れの郷土に適する文化を都會から移入して、郷土の改善に資さうとする人の寡少なのは寔に遺憾である。而も却つて、とかく不適當なものの移入され勝ちであるのも困つたことである。

輸入文化の咀嚼には、一般に長日月を要するものである。而して所謂スピード時代の今日では、それに多大の時間を費すを許さない場合がある。吾人は朝鮮及び支那文化の輸入と咀嚼とは、實に一千數百年の間を費した。而も不幸にして、今だに消化不良の痕跡が、直り切らない肺炎の痕のやうに、日常生活にさへ現れてゐる。日本人の虚禮好き、誇大な形容好きなどは、その一例に相違ない。日本人の本質は、モット率直であり、又粗野であると共に親切である。それが心にも無いことを口にし、毛頭無禮を働かないのに一々失禮と謝罪し、誤つて西洋人に謙讓の美德と思はれ、それを賞揚されるに及んで自惚れて見たりするのは滑稽である。氣候の關係から、頻々沐浴する習性を見た西洋人から、無比の潔癖と驚嘆されたに因を發して、世界一の潔癖のやうに自惚れてゐるのと同じく、寔に笑止千萬である。それ程潔癖な人間が、塵埃を道路に掃出して放擲し、便所や下水を不潔にして平然たる筈が無い。常に謙讓

の美德に溢れてゐるのなら、浴場の如き赤裸々な場合に、あゝも他人に湯水を撥かして恬然たるのも妙な話である。

儲て、吾々山岳に親む者は、常に僻地に旅し、文化の假面を脱いだ國民に接し、又山川風土に直面して、よく國土と國民の本質を知るの機会に恵まれてゐる。尤も近代の登山家の間には、登山以外の事に心身を勞するを潔しとしない奇矯な傾向も見えるが、それは未熟者流のことゝ當分見逃すとして、さて夫等一般の人々が更に目を拭うて我が國土を正視せんことは目下の急務であると私は信じて疑はない。

何故なれば、我が神州の國土は一日一刻と、華美な文化に眩惑されたり、又は机上の空論に立脚して國家を指導しようとする一部の國民——夫共非國民！——の爲めに蝕まれてゐる現状である。その一例として近時とかくの問題となる風景地の破壊を擧げることが出来る。邦内他に代る可きものもない國寶的風致區域を、一種の事業の爲めに犠牲に供する如きは、愛國者の坐視するに忍びざる處であるが、或は目前の利益に捉はれたり、又は物質文明に眩惑されて、その事業がその地域を失うても尙國家に貢獻し得るものと誤信し、國土に對する認識不足から、敢て破壊を謳歌せんとする者がある。

而もそれが、日夜金銭上の利益のみを追うに汲々として、他を顧ること

を知らない事業家側のみでなく、國家擁護を主眼として國民民福を計る可き立場にある官憲の間にさへ、是認されんとするは、寔に慨嘆す可きことでなくてはならぬ。

近事政府並びに關係者は、日夜心勞を敢てする程の熱誠があるのならば、貴重な國寶的地域の壊滅に對して、黙して立たないのは何故であらうか。彼等は斯くも我が國土に對する認識に缺如してゐるのであらうか。心ある國民は、須らく聲を旺にして國土擁護を叫ばなければならぬいと痛感せざるを得ない。

更にまた、近來「非常時」の流行語と合言葉となす處の「國防」についても一考する必要がある。「國防」なる語は國を防ぐのではなくて國を防ぐものと解してみると、何に對して國を防ぐかについて考慮しなくてはならない。

國民の多數は、今にも四周から外敵が攻め寄せ、數百臺の敵機が帝都の上空を襲撃するかの如き妄想に陥つてゐるらしい。然し乍ら、斯くの如きは、一旦緩急あつた場合の話である。好戰國でないことを標榜してゐる我が帝國が、自ら進んで事を構へる筈が無いから、幾十年に一度起るかどうかわからない程、滅多に無い事であると見る可きであらう。

然し乍ら、外敵と目すべきものは必しも軍事關係のものに限つたことではない。學問上にも、商業上にも工業上にも、その他何によらず、平

時から吾人は諸外國と拮抗して敢て後れを取らないように努力しなければならぬ。これも亦「國防」の一半乃至大半をなす可きである。

敵はまた、必しも外部のみにあるとは限つたものではない。獅子身中の蟲は却つて恐る可く戒む可きである。わけても、國利の美名に隠れて國土を蝕むものは、國民の注意を逸する間に着々歩武を進めて、遂に恐る可き不利災害を招來し易いのである。されば「國防」は又内に向つても等閑に附す可きものではない。それにも拘らず、爲政者も亦庶民の大多數も、一向にこれに心付かないで、平然たる有様であるとか見えないのが、目下の狀勢である。假令對外的に軍事上の勝利は得るとも、國土の舊態は何處にも發見するを得ない狀態であつたとしたら、國防に關する官民の努力も、空虚なものとなり終るは必然である。

國土を愛する國民は、宜しく緊樺一番、その擁護に當らんが爲めに、我が國土の再検討再認識の旗幟を押し立てなければならぬと私は信ずるのである。敢て秃筆を揮つて、簡単に國民の自覺に醒める所以は茲に存するのである。(昭和十年十月稿)

『他山の石』

ユングフラウ鐵道、マッターホルン鐵道のことなど

松方三郎

「ユングフラウに登山致し候、天氣晴朗、雄大なるアルプスを一望の下にさめ些浩然の氣を養ひ申候」など、手紙を呉れる人がある。よく見るとハガキはヨツホから出てゐて登山ではなくて、ユングフラウヨツホまで汽車で来てそこで腰を抜かして了つたといふ丈の話だ。甚しいのになるとゴルネルグラートでマッターホルンの頂上に登つた氣分になつて結構冒險登山的口吻に満ちた手紙を書く人もある。

その儘の話。「外國ぢや山の上まで鐵道がかゝつて居ますよ」なんて知つたか振りをする前に、外國ぢやその鐵道を山の上から驅逐するのにとどれ程多くの闘争があつたかを一應知つて置く必要があらう。それ等の先輩の努力によつて、今日ともあれあの程度に、アルプスの自然が保存されてゐるのだからである。

二

ユングフラウ鐵道の敷設案が初めて發表されたのは一八八四年のことだ、之の發案者はチューリヒの大資本家として名のあつたグイヤー・ツエルラーといふ人間であつた。そしてその年の暮の聯邦議會には敷設計可願ひが出て忽ち大問題となつた。計畫はアイガー・グレッツ・チャイからアイガーの洞中に穴を掘つてアイガー・メンヒ兩山の中をもぐつた擧句ユングフラウの頂上直下まで行つて最後はエレヴェーターで頂上のホテルに顔を出すといふのであつた。勿論定り文句のやれ山岳氣象研究所を頂上に設けるの、やれ科學的進歩の爲めだといふ見聞のものを列べて、その上、資本家一流の議會政策が成功して無事議會を通つて了つた。怒

りつと譯だ。勿論天氣でも變れば

つたのは登山家仲間である。

「一體ユングフラウの頂上にホテルと測候所を造る廣があると思ふのか、足で登る登山者の立場は随分考慮するなど云つた所で、頂上がまる毎ホテルになつては登山家には登る頂上はない。登山家と屋根屋と間違へては困る」と云つた風の話であつた。勿論反對は瑞西だけではなく、凡そアルプスに關心を持つ凡ゆる國人が反對を稱へたものである。たゞ外國では、ともあれ瑞西の議會が決定したものを外から覆すのは問題を政治問題化する虞があるといふので遠慮勝ちであつた。

「ユングフラウの頂上に鐵道がかかるたつた一つの取得は片輪者でもアルプスの頂上までせり出してアルプスは下から眺めるものだ。雪線の上には美がないと云つたラスキン風の見方が正しいかどうかを見極めることが出来る位のことだらう。こんなことが遂に鐵道が許可になつた當時漏されたせめてもの嘆息であつた外國で瑞西の議會の腰抜けぶりにどんなに不甲斐なく思つたか。當時のアルバイン・ジャーナルの記事などによく出てゐる。併し、ユングフラウはアルプス何百座の頂上の一つに過ぎない。それは我が富士山の存在とは大いに趣を異にしたものである。鐵道工事は一八九六年開始され、千二百萬フランの費用を投じて一九一二年ユングフラウ・ヨツホ（三四五七米）まで完成した。此の鐵道が

之から先に伸びなかつた理由は世界大戰の勃發など色々あらうが、工事中終始續けられた一般からの猛烈な反對が興つて力あつたことは謂ふ迄もない。そしてユングフラウの頂上は今でも足で登る人間の天地として確保されてゐるのである。勿論何人も之が工事に示された瑞西人の技術的天才を認めるのに吝なものはない。併し、今此の鐵道をユングフラウの頂上まで伸すと云つたら、恐らく狂人だと云はれるだらう。

三

モンブランの一帶ではモンタンヴェール（二〇四三米）に登る鐵道、サン・ジェルヴェからラシャ（二〇〇〇米）の鐵道、エギーユ・ドゥ・ラ・トゥールの麓の水河終點驛（二四〇六米）迄の索道の三つがあるが何れも登山者の好個の足場でこそあれ、山の頂上とは遠くかけ離れたもので、ホツホ・アルベンの範圍の山登りは全部登山者の爲めに殘されてゐる。コル・ド・ヌ・ドームのグアローの測候所もラシャの終點からは四千三百餘米のドーム・ド・ヌ・グーテを超えて行かなければならない。一八九九年のグアローの最初のモンブラン鐵道計畫では頂上まで行く筈だつたし、グアローともある人の計畫だから大いに自然科学の發展を志した譯だつたが、内外の輿論は此の鐵道を尾根沿ひに、モンブランの頭までつなげることを承知しなかつたもの

である。

フランスでは此の外にラ・メイジュで一八九四年頃矢張り鐵道をかけやうと云ふ話があつた。その計畫に従へばメイジュの尾根に縦に風穴を明け、頂上にはオテル・オブゼルグアトールなどいふものを造る筈であつたが、之亦流産に終つた。

何れも恐らくは十九世紀末期の科學崇拜時代の複産物で、今日瑞西の各山間で憶面もなく風致を害してゐる馬鹿でかい、こけ脅しの強い、下手に都ぶつたホテル建築と同時代に屬するものである。

四

登山史上或はアルプスの歴史の上で最も華々しい、そして美事に成功した鐵道排斥運動は一九〇六年から翌年にかけてのマッターホルン鐵道打倒運動であつた。今日、ローヌの谷のグイスブからツェルマツトに登つてゐる鐵道はその當時のマッターホルン鐵道計畫の半分なのであつて一九〇七年一月に聯邦議會が利權許可を可決した當初の計畫に従へば、更に此の鐵道がシワルツゼーに登りマツタホルンを根元から頂上まで殆んど垂直にぶち抜いて、所々瑞西側伊太利側と窓をつけては遊山客にアルプス氣分を振舞はふといふ話であつた。四ヶ年計畫で經費が約一億五千萬フランと云ふ振れ出しだから相當鼻息の荒いものであつたことは確かだ。

怒つたのは瑞西は勿論内外の山岳會の連中であつた。「アルプス高峰は全瑞西國民の精神的資産であり、祖國自由の象徴である。それ等の頂は賣物ではない。こんな陳情書が瑞西全國に廻され、一九〇六年の夏既に四萬人の人が之に署名をし、代表者は聯邦政府に膝詰談判に及んだものである。運動の主體は瑞西郷土防衛聯盟といつた風のものであつた。

此の時には外國の登山家仲間も流石に遠慮してゐる譯には行かなくなつたものと見え、英國では瑞西保勝會英國支部といふやうなものを造つて猛烈な反對運動に出た。一九〇六年十月の支部總會の議事録などを見ると、サー・マルチン・コンウエイ（今のコンウエイ卿）を議長に据えブーデイロン、プリストル僧正、ボロツク（今のサー・フレデクツ・ボロツク）等アルバイン・クラブの當時の中堅所が交々起つて熱辯を振つてゐる。ジェイムズ・ブライス（後のブライス卿）やウイムバーの手紙等もその會議の席上で讀み上げられて大いに氣勢を擧げた譯だが、此の反對運動は實に英國に止らず獨逸兩國でも、殊に青年學生の間に猛烈な勢で擴がつて行つた。自然の崇高がその胸に訴へる程の者であればマッターホルンを鐵道や昇降器で登る如きは冒瀆俗化以外の何物でもないことと考へるだらう。かゝる山岳の一部人士の利益と時代の物質主義の爲に犠牲に供する事は人類にとつ

て償ふ可らざる損失を齎し、来る可き子々孫々に對して不正を敢てすることであらう」こんな言葉がその英國支部の總會の決議の中に見える。

今日マッターホルンに登る人、ツェルマツトから之を仰ぎ見る人の多くは、彼等の先人達が如何に此の山の今日有るが爲めに闘つたかを知らない。勿論今更らマッターホルンに堅穴を掘らう等といふドンキホーテは出ないだらうが、今世紀の初頭には此の山が、危くも、鐵道會社の食ひ物となり、然も此の計畫が議會を通過し、マッターホルン四千五百米の頂——多くの傳説、登山史上の英雄傳的物語と結びついたその頂が、見る影もない遊山地化してしまふ所であつたといふ事實は我々に教へる所が多い。

五

「何事によらず日本精神の聲の高い今日の事であるから萬事我國は我國の見識を以てやるべきで外國の例等を引合に出すのはどうかと思ふが、ケーブルカー等と云ふハイカラな物になると機械文明の先進國の例も一應は考へて他山の石となすべきではないか」（「東朝」九月十五日所載、辻二郎氏筆「富士山のケーブルカー」参照）此の一文の筆者は此んな振れ出しでケーブルカー賛成論を稱へたのだが筆者が若しアルプスでの登山鐵道がどれ程反對され事實上制限されて

居るかを知つて居たならば此の「他山の石」が筆者の意圖とは正反對の結論を導くことになるのを知つて居たらうに。

「機械文明の先進國」は風致保存運動でも、機械文明をその正當の範圍に制限して遠く運動に於いても残念なら我々の先進國であるのだ。モンブランの上にもモンテローザの上にも測候所がある。就中、モンテ・ローザのマルゲリタ頂上のは登山者の爲めに一部を割いて山小屋としてゐる。併しどつちも雪や氷の山坂を散々歩いた果にあるのだ。ユングフラウヨツホの後のメンヒには一時雪の中に天幕張りで觀測所が出来てゐたことさへある。科學者は出來合ひの大きな機械を山の上に擔ぎ上げるの丈が能てはあるまい。「先進國」では多分必要な機械も人間の肩に背負へる小型のものにするか、他の方法でその科學的觀測もやつてゐるのだらうが、鐵道を山の上までつけて呉れ等と弱音を吐いた人はゐないやうだ。科學者がその熱意と天才とを自負してゐるのならば、その位の犠牲は甘んじて受ける覺悟をして然る可きだらう。そのかみの例をとつてもドウ・ソシニール、チンダル、フォーブス、アガシ、デソール等々、アルプスの科學に貢獻した先覺者は一人として惜しみをした人は居なかつた。日本の科學者も少しこんな「他山の石」を骨めて見てはどんなものだらう。

札幌の夏と秋(二)

初見 一雄

ニセアカシアの花が咲いて其の香りが夕暮の街を薫らす様になると札幌には、そろそろ夏が始まるのである。一年を通じて之の夏程之の土地にとつて健康的な季節はない様である。朝晩が涼しく日中の二、三時間を除けば些したる暑さを感じしめない北國の之の都は確に住み善き場所であると云ふ事に疑を入る餘地はない。春に我々を悩ました埃りばい風もいつしか遠のいて其のお代りが爽涼たる朝の息吹きとなつて訪れて来る。我々を圍む自然は、其の總てのものは活き活きとして来る、雪の消へきつた直後の山は其の緑りがいかに若い、而し驚くべき夫程の速さでもつて、其の艶を増すし色をも濃くしてゆく。私達が一寸油斷をしておる間にエルムと云ふ名をもつ

木が葉をつけだすと間もなく色々の鳥が渡つて来る。未だ之は春の領分ではあるが、五月二十頃遅くも二十三日迄にはカツコーがやつて来る。之はちやんと習つた事だし身を以て經驗したから確かなものである。札幌へ来た當時「春はカツコーがなくて悪いですよ」と教へて呉れた人があつたが、カツコーなら五月下旬の神河内邊りで既に何回となく聞いてゐたしさう大したものでもあるまいと思つてゐたけれど、いざ朝の起きぬけに其の一聲をきいた時は成程いゝなと思つた。

カツコーの外にも名前を知らないから云へないが大小様々な鳥がやつて来て歌ひ廻る、丁度之の時は冬の閑山に群棲してゐた鳥が練の獲れる海岸地方へ出稼ぎにいつて其の姦しい聲が留守だから、綺麗な鳴聲が情をきかして我々の耳を樂しませる。

巢を作つたり、生まれた雛に餌を運ぶ鳥が急がしく飛び廻ると同じ具合に、初夏から夏にかけて街は日増しに人出が多くなるのである。冬のスキーで郊外へ向いてゐた足が自ら街の方へ向きを變へたのかも知れないが美しい衣を着た人も街路をかざる様になる。

例へて云つてみれば東京の様な人口の混入つた大都會に生活してゐると季節の移り變りが何時始まつて何時終つたのか、それをはつきり識るのは困難であらうし或は不可能な事であらう。僕もそれをかこつた事があつた。而しその札幌ではあまりにも自然が身近に迫つておる故か、又は其の美しいものゝ中に街が建たれてある故かその土地ほど四季の移り變りを判然とさせて呉れる所はない様に思ふのである。それを感じた時に本當に嬉しいと思つた。同時に之の地方の街に生れ育つた人々の幸福を羨ましく思つた。

手稻から西へかけての山脈が春咲く其の最後の白地を緑で埋めてしまへば後は濃淡の差こそあれ緑一色になる。そして人間共も軽い衣に着かへ始める。裾さばきの易さが勢ひ散歩に誘ふと云ふ事になつて十字街とか大通りとか雑踏を來たす様になる。こうして夏が人の心に迄這入りこんで來たのである。

色々の人が出歩く様になつてから先ず眼につくものは婦人の自転車乗りの多い事である。意外に多いのだから、外人の目を注ぐに充分である。小さな女の子から、其の間をとんで三十、四十代中には五十に手の届き相な人迄ゐる。運動のためと云ふにはいさゝか激し過ぎると思つたからきいてみると産婆だ、善く觀れば黒いカバンを持つてゐるし顔付きも眞剣だ、黒い編上げ靴に御手製の簡單服とくる、颯爽たるものだ、そしていかにも其の數から推しても判斷がつく筈だつた。よくやつてゆけると思ふ程多いのだけれど之は札幌の出産率が案外高い故かも知れない。

之の立看板をよく調べてみると助産婦と書いてあると普通に産婆としてあるのと二通りある、つまり年齢の老若を示した積りかも知れない。そしてこう云ふ家には下宿人をおくのが多い、電話があつて便利だと云ふ甘言に乗せられて僕も此の種類に移つてひどい目に會つた、話が横道に入るのはいさゝか氣がさすが押切つて書いてみる。

引越し先は婆の方で助産婦ではなかつた、兎に角女の身でも嫁ごうと云ふ心掛けだから萬事がつゝしまやかで質素儉約である。そして、其の主人と云ふのが日露戦争で在郷軍人分會長とくるから質實剛健だこれは飛んでもない家へ舞込んだものと侮んだが紹介者の手前しばらく目をつぶる事になつた。

嚴格な點はこちらも身を緊さしめられて大いにためにもなるが、吝い點は困つた、先づいけなかつたのは味噌汁だつた、僕は朝寝坊なので出來たての湯氣のモー／＼と立つてゐる様なのは減多にありつけぬ、煮詰めては伸し、伸しては煮詰めた二番三番煎で薄くなつてゐる上にあるかなしの實が浮ぶといつたのが常用になる。そこで尋常に拘つてゐたのは實にありつけぬ、おまけに味噌汁は透き通つて見へないから實の在處がわからぬ、杓子でもつて二三回かき廻してから、逆モーシオンをかけると、二、三片が引かゝると云ふ仕組を考へた。

或る朝こうやつて大物を當てた事がある、手應へがいつとも違つて重みが掛つてくる、占め占め、すつかり喜しくなつて恥かしい話だがニヤ／＼笑ひ出してしまつた、そこで恐る／＼引上げた、見るとなんと鮭の尻尾である、啞然として言葉がないまさか喰へと云ふ由でもあるまいと思つたから問つてみると、結構なダシになるとの返事だ。あきれたもの

である。大體鹽引きなどと云ふ代物は猫でさへ素通りすると云はれる程のもので猫マダギと云ふ別名もある程だそれを人様の飲物に入れるとは一應は憤慨もしてみたが早く出るに若かずと胸をさすつてゐる中に夏休みが来た。

夏休み、幼稚園の昔から今に至る迄何度來ても嬉しいのはその夏休みである。大雪の方へ一寸行つて歸りに直ぐ歸省と云ふ事にした、地方へ出てから初めての歸省であるから若干勇ましい気分になつて久方振りに両親の前に出て挨拶をする、談をする。段々進んでゆく中に旗色次第に悪くなる知り得べからざる事迄知られてゐるのである。夜は遅くなる相な、と云ふ邊りから妨職及ばなくなつて兜を脱いだ、どうも變だ、直接家と通信のある人はあれとあれと頭の中で繰つてみるが人柄から推しても内通する様な卑怯なまねはしない、してみると、と思ひ當つた時にこう云ふ通知せがあると思はれた手紙の筆蹟こそ、紛うかたなき産婆夫人のである。婆ややおつたな、遙に北の空を睨んだのである。

× × ×

北海道の秋は平原からやつて来る昨今の兎作續きで豊に實れるなどは云へないが收穫の秋には變りない牧草を山盛りにした馬車をテルが率いて来る、空が猛裂に燈り渡る之の時分の札幌郊外は仲々善い、味覺の秋とか云ふ時季で先ザリソグが出る

最初に出るのが黄魁で最後が十一月下旬の國光其の間に色々の種類が店頭を賑はすが其の味は氣の賣だかどれも青森には及ばぬ、果物に限らず北海道で出来るものには旨いものは少い、野菜には新鮮なそして豊かな味ひがあるが他のものは大抵だめである、魚にしてもそう、總てが大味で細い蕨がない、それにもう一ついけない事には名前が悪い、秋の初めから鮭が獲れだす、所謂新巻である。之が美味しい。而し毎日續くせいか名附けてアキアジと云つてしまふのである。こう云ふ例は未だある、鯛と比目魚素直にさう呼べば善いのをメマキにテツクヒと云ふ、之の言葉の響きからはどうしても味覺は出て來まい。(續)

富士山頂に滞在して

戸塚 武彦

高さが身體に及ぼす影響を探索する目的で八月下旬一週間富士山頂に滞在して來た。今度の企ては云はゞ一つの探りであつて、將來何回かの同じ様な研究と、現に一行の内の一人が去年から今も尚引き續き行つてゐる航空機並びに低壓室を利用する實驗等の結果をまつて委しい事は報告する積りではあるが、我々の短い滞頂期中に感じ又は見開きした事を二三書きつけて皆様の御教示をあふぎ度いと思ふ。

山頂で一番困つた事は——それは

初めから豫期し且つ用意はして居た事であつたが——やつぱし飯の不味い事であつた。米には約二割程餅米を混ぜ、通常よりは一割位水加減を増し、強い火で炊き上げ更に良く蒸らす事によつて、嘗て僕が登山の際食はされた糊の様で然しもののある飯では無いのだが、何しろ八十三四度以上には熱が上らないのだから變な飯である事は確である。最初の一日は我慢出来ても二三日になると堪らなく苦痛となつて来る。山頂生活者に聞けばやがて段々と慣れて來ると云つたが、そして我々も少しは我慢が出来た様になつた物の下山の日下界で食べた飯が到底も上味かつた事から見ても不味かつた事だけは確である。矢張りこの様な企ての爲めにはパンを焼く事を覚えるか(日本人がパン食で堪えられぬならば)又は壓力鍋を用意して行く必要があると思ふ。現に山頂の氣象觀測所の人は壓力鍋を利用するので「かへつて下界よりも上味い位」の飯を食べて居るさうである。

次に山岳病? であるが、之には慢性的物と急性の物の二つを區別しなければならぬ。頂上に着いた時からずつと皆の呼吸の深くなつた事に氣が付いた。時に溜息の様な深呼吸が交る。之は酸素の缺乏(氣壓が約四百九十三ミリ)を補ふ爲めの合目的な反應である。中には息苦しいと訴へる者も居た。その他専門的な事は爰で述べ

ようとは思はないが何よりも著しい事は頭痛である。夜半から後頭部がしめつけられる様に痛み出し朝の三時頃はその爲めに眼が覺める程である。そして起床して午前十時頃になると非常に輕快する。頭の餘り痛い時には少し嘔氣さへ催し食慾は全く無くなる。多くの人はこの症狀が日増しに強くなり三日目位が最も甚しい。それから次第に癒つて五六日目には殆ど良くなつた。この事は山頂生活者の全部が異口同音に主張して居る事でもあつた。「一週間経てば後は平氣です」と。

腹が空くが食慾が無い。ぬいけれど眠れない。頭が茫然として纏つた事が考へられない。少し餘計に動くと思ふ。こんな訴もあつた以上述べたのが慢性的の山岳病であるとすれば次の急性のそれである急性の高氣病と云ふ物は四千七千米に於て現れるので自由氣球や低壓室等で急激にこの高さに達した時に起る症狀でありそれに就ての委しい事は爰で言はないが、富士山で見られた登山者の山酔ひは正しくはこの意味の物とは違ふ様に思へた。自覺的には體を少し動かすと動悸息切れ等が起り、食慾全くなく嘔氣を催し、頭がフラフラとし實際に卒倒する事すらある。休んでみるとウツラ／＼と眠りを催す様な事もある他覺的には顔面蒼白、脈搏は頻且つ小、時には呼吸不整さへ起る。この事は登高の途中多くは突然と起つて

來る。さうなると一歩も進めない様になる。多くの山岳遭難の原因がこの症狀によつて惹起されるのであらうと思はれるのであるが、之は僕一個の經驗並に結論であるが非ずしも高山に於てのみ現れる症狀では無いと思はれる。僕は高い所では起つた事はないが千米級の山で二度やられた事がある。之は簡単に云へば「へばり」の症狀である。

それは多く何かの原因で食物を少ししか食べなかつた時に限つて起るのであつて、その様な時に或程度以上へばると先づ食慾がなくなる。この時經驗のある人は「ゲエ」もどしさうになつても無理やりに飯を食ふ。さうすると多くはへばり夫自身が直に或程度回復する物である。この時、いくら勸めても「食ひ度くないんだ」と云つて食はずに尙も動作を續けると突然前に云つた様な症狀が現れて來て動けなくなるのであるこの際勿論餘りに心臓が弱つて居たら強心剤を注射する必要があるが、先づ暖くして安靜その次にはやはり何とかして食べさせる事である。暖かい甘いコ、ア等は好適である。次には無理にも少しみになる食物を食はせる事である。それから先行動を續けないでも済む様な場合には少量のアルコール分も悪くない。「へばつたら先づ飯」之は當日頃儀の主張する處だが今度もその感を深くした。山酔ひを起した人は皆飯をろくに食はずに登つて來てゐる(一行中には

一人もなし。勿論富士山で見た之等の山酔ひは、空氣の稀薄な事も原因の一つとして加はつて居るかも知れないが。

次に富士山に登ると物が黄色く見える、之が山酔ひの一つの症状だと主張する人が甚だ多い。實際一行の全部にこの黄視が起つた。然し之は寧ろ他に原因がある。それは富士山の頂上近くになると地面が著しく赤味を帯びた岩になる。之は麓から富士を眺めても明にわかる事である。常に赤い地面に眼を落して一步一步登つて行く時、突然眼を他に轉ずると赤に對する對比色として總ての物が黄緑に見えるのである。草いきれする坂道を登る時物が緑の對比色として赤く見えるのと同じ理由によるのである。その證據として暫く空を眺めてみるとこの黄視紅視が癒る事でも確かである。

今度の實験に於てヒマラヤ遠征の眞似して一行の半数に肝臟製劑を食はせて見た。山岳訓政殊に血球の増加に何等かの影響がありはしないかと。然し今度の結果だけから見ると肝臟を食つた人も食はない人も大して差は無かつた様であつた。

最後に山頂生活者から豫言せられた事があつた「下界に下りると當分毎日寝てばかり居るでせうよ」と。本當に下山後四五日は夜寢となくよく眠つて旅行の眠り病みたいだと笑はれた。疲れが出た爲ばかりでは無いかの意があるのかも知れない

新刊紹介

「第五年」

九善山岳部年報

編輯後記にもある通り此の山岳會もいよゝ創立以來七年となり年報の發行も第五號を數へることとなつた。集中登山とかアルピニズムと取つ組み合ひをやるやうな登山方面へは餘り積極的に出てゐない様であるが毎號眼を通してゐると會員諸士が眞面目に萬遍なく山を楽しんでゐる様子がよく解る。本號には新人の顔が大部並んでゐる、外部に賣る爲めの報告でない以上悠うした編輯方法はお互ひが楽しみ合ふといふ意味から云つて誠に結構な事だと思ふ。自分達の山行を廣告するのが登山團體の目的ではないのだから。

目次は説苑紀行想片詞藻踏跡の五編に分類され、寫眞も素人の私にはよくわからないが立派なものが八枚も載つてゐる。少しの嫌味もない親しみ深い編輯振りだと思ふ。

巻頭説苑の「登山意識の日本的形態」(植草氏)は日本に於ける登山意識の大部が過去からの繼承である事を相當廣い範圍からの研究によつて例證してゐる。第二の「短スキーの體験と私見」(角倉氏)は京大の西堀氏のデザインされたものに獨創の工夫を加へ之を實際に冬期に使用した經驗の報告である。五尺七寸五分の板にセルロイドのエッジと鋼鐵のビ

リ鐵をつけ普通の長スキーなどの遠く及ばぬ優秀さを力説してゐる。あれを讀むと誰でも早速やつて見たくなる事と思ふ、勿論私も實際さう感じた一人である。あれが文章だけでなく詳細な圖面でも別刷にして挿入してあつたなら一層參考になつたに違ひない。

想片の「遺難未達?記」之は幕の湯の下で山川氏が吹雪の一夜を明かした實驗記だ、何等の粉飾もなく思つたそのまゝを書いてゐる、定期を入れたセルロイドまで焼やして火がつかなくなつたとはいさざ心細かつた事であらう。

「ヒマラヤの三つの探險に就て」(白石氏)は最近行はれたものの簡單な解説であるが、あゝいふものは一應序に一つの表の様なものにして置いたなら尙印象に残つてよかつたかと思ふ。

其他二十一項目に分れて部員諸士の山行記録隨想詩片などがあるが紙面の都合上失禮乍ら略させて戴く。(一〇、一〇、六) 吉澤 一郎

日本北アルプス地方地圖

信濃教育會北安曇部會にて昭和十年十月、長野縣北安曇郡地方地圖、(別名日本北アルプス地方地圖)十萬五千分の一の七色刷のものを發行した。其範圍は松本市、上高地以北、東は飯綱山火打山、西は早乙女岳上ノ岳、栃尾、北は糸魚川に至る從來陸地測量部の地圖が登山者の

指針として唯一のものであり、澤の名、山名の呼稱、山小屋の位置、誤謬の訂正等、地圖への書込みが登山者の一つの重大なる仕事と、れてゐた時代があつたのに對し、近年は鐵道省のスキー地圖、或は地人社のエクスカッションマップ、白馬岳立山黒部峽、上馬地附近又は今回の地圖の如き特色あるものの發行されて行くのを喜び度い。

此地圖の編纂は二ヶ年四ヶ月の長い歳月と多大の努力が拂はれたと云はれてゐる。山岳地帯を見るのに、最近の登山路、山小屋を初め山名、地名等各方面に亘つて非常なる編輯上の努力の跡を見る。特殊なる記號の一例として登山案内所、スキー場、雪溪、山小屋の營業、番人の有無の區別等までも表示されてゐる。恐らく最近の事情を最もよく現したる地圖であらう。

綠色を地色とし、褐包の四十米の等高線の入るこの地圖は、登山者の大部分が常に親しみ、最も利用されるところの五萬分の一の地圖と比較する時には、むしろ二十萬分一帝國圖に近い感と與へる。十二萬分一といふスケールはこの地方を一葉の地圖として發行させる爲の結果であらうが、之だけの努力と勢力を拂はれるならばむしろ五萬分の一の圖面として數葉に分割されん事を望んだ、さすればより以上に詳細な記述も許された事と思ふ。

は、年毎に變化の多い山の事情につれて、出来るだけ同數を多く、改訂版の發行に努められ度い。(角田)

(發行所 信濃教育會北安曇部會發賣所川流堂小林又七、古今書院、定價六〇錢)

會員通信

拜啓 時下彌々御情穆奉賀候陳者唐突ながら本日の東京朝日新聞によれば富士山頂までケーブルカーを通ずる計劃が多少の具體性を有てるかの如く、報導せられ居り候が、右は如何なる點より見ても日本のみならず、世界の靈峰たる富士を豪無しにする暴案たるのみならず、日本國民性より見るも永遠償ひ難き損失を與ふるものと存じ候。兎に角、堪忍なり難き事態と信じ候間本會に於ても何とか全國民に呼びかけて反對運動を起し一致結束を以て營利以外何等眼中に無き途轍もなき暴案は今後再び據頭の機無き様當局を鞭撻牽致し度愚考罷在候へ共御高見如何に候や先づは當方存寄のみ申上候敬具

九月十一日 會員 手塚宏壽

前略 去る九月二日、三日、四日當地方には稀なる好晴にめぐまれ、擇捉島第二の高峯散布山(一五八七・三米)に登山仕り候、頂上附近にて五十貫もあること思はるゝ白銀色の互應に退はれ、漸く命びる いたしたる次第おどろき申し候何分人夫

が山馴れぬ男の脈々随行せる次第にて諸事不手際にて此の收穫は全く好晴の賜に有之候

昭和十年九月十日 擇提島嶽取にて

田中 薫

久し振りの山行、色々考へても結局廻りの手近きに引かれてしまひました。

銀澤の秋色は捨てがたいものでした、雪溪も夏とほとんど變りなく、たゞ長次郎平蔵谷の上部は歩きにくから場となつて居ました。

二十三日晴濟たる空模様の中に銀に往復しました、頂上では強風の中に粉雪が舞ひ温度も零下十二度に降りました。

二十四日は凄く東南風の暴風雨で夜半から釜をユリ動かし彌陀ヶ原をふきとばされて降りました。この日二十年間兄弟傳承のハードマンの帽子を風にとられたのは千秋の痛恨事でした。

方暗雲の中に銀が姿を現し今朝降つて来た鶴ヶ御前釜あたりも浴室の窓からのぞまれそんがづつと過去のことがあった様な思ひで家族と夕食を共にしました。

二十四日 島田 武時

會費繰込について

昭和十年度會費(金六圓)未拂込の御方々十一月中集金郵便を差上ますから御留守中でも差支なき様御願致します。

會計 係



會務報告

九月定例理事會報告

九月十二日 午後七時 事務所

出席 三木、飯塚、黒田、額田、田口、逸見、櫻井、森田、

(委任)小島、木暮、島山、横、三田

一、山日記決算ノ件

一、山岳避難救助制度案委員會中間報告

一、山岳第一號發行報告

一、山岳第二號編輯報告

一、第六十九回小集會ノ件

一、山岳懇談會ノ件

一、富士、尾瀬保勝問題ノ件

一、關西支部報告

十月定例理事會報告

十月十五日 午後六時 本會事務所

出席 高瀬、小島、松方、島山、

額田、磯野、田口、櫻井、

森田、黒田、飯塚、(委任)

木暮、三田、逸見、

一、山岳第三十年第二號編輯

一、第二回山岳懇談會報告

一、山岳救援機關案募集ノ件

一、來年度理事候補者推薦ノ件

一、尾瀬、富士ノ保勝問題ニ關スル件

一、十一月七日七十回小集會開催ノ件

一、關西支部報告

a、關西大會ノ件

b、支部集會室ノ件

第二回山岳懇談會

時 十月九日

所 三信ビル、東洋軒

議に發表した懇談會を岡田中央氣象臺長、藤原咲平博士、三浦榮三郎氏外三氏の御來會を得て備し氣象問題を中心とし避難防止其他一般登山に關する問題が題目となり大いに啓發される所があつた。特に登山者にとつて最も緊要な氣象問題に就き中央氣象臺の方々と吾々を接近させ將來お互の研究と登山に便宜を與へる機會を作り得たのは非常な幸であつた。次會山岳懇談會題目並に世話人は未定。當日出席者は左の通り。

第二回山岳懇談會出席者

中央氣象臺 岡田武松博士

藤原咲平博士

三浦榮三郎氏

菅原 芳生氏

三宅 恒夫氏

菅根幾二郎 中司文夫 武藤 晃

黒田 孝雄 森田 茂 河合重次

大久保 廣 加藤肇逸 逸見眞雄

角田 吉夫 中島常二 土屋鎮雄

濱野 正男 木村鎮吉 塚本繁松

廣瀬 潔 吉田竹志 安田正介

福田嘉四郎 尾崎喜八 折井健一

林 幹夫 山本正成 田口二郎

石 原 巖 三浦 新 須賀幹夫

黒田 正夫 堀田彌一 黒田初子

山縣 一雄 須賀太郎 岡本勝二

田中 太郎 渡邊 漸 磯野計藏

松方 三郎 額田 敏 木村昇平

國藤研二郎 鍋倉英次 三田幸夫

小森宮章正 淵秀 隆 渡邊兵力

喜多又太郎 織田 明 伊藤新一

浦松佐美太郎

有志晚餐會

十月三日夜神田杏花樓に於て秋の有志晚餐會を開いた。來會者十六名席上松方氏の提議で尾瀬の水電問題富士山のケーブルカー問題に對する我々の態度について意見の交換があり、風景擁護に夫々熱情を見せ、中には慷慨の士も現れ興味深かつた。次回の世話人は三田幸夫、田邊主計、田口一郎(今回病氣缺席のため重任の三氏に決定した。

世話人

逸見 眞雄

島田 巖

田口 一郎

當日の出席者左の通り

松方 三郎 田邊 主計 角田吉夫

木村 鎮吉 高頭仁兵衛 中司文夫

磯貝藤太郎 岡田 喜一 吉田竹志

飯塚篤之助 黒田 孝雄 尾崎喜八

三田 幸夫 土屋 鎮雄 逸見眞雄

島田 巖

日本山岳會關西支部設置とルーム開設記念晚餐會

本會關西在住會員にとり特望の關西支部が設置され、事務所も九月から大阪市北區堂島上一丁目大阪貯蓄銀行三階八號室を借受け開設されたので、之が記念として十月八日夕五時から同所に於てルーム開き集會を行ひ、引續き七時から堂ビル清交社で記念晚餐會を催し、各自款談盛會を極めた。當日出席者左の通り、

評議員：今村幸男、榎谷徹藏、通常會員：河本俊彦、笹谷良造、影山實造、本出英治、宮崎武夫、朝野記太留、中原繁之助、三木高峯、西岡一雄、中田伸直、杉山良平、武山良次、中村勝郎、小川正十郎、桑原武夫、大野英一、安井喜之助、澤本辰雄、高橋勇次郎、喜田清左衛門、渡邊小兵衛、高岡藤兵衛、二本信次、田中薫、栗飯原健三、松井久之助、以上廿八名

新着圖書

關西學生山岳聯盟報告 第六號
尾崎喜八著 山の繪本 朋文堂
川端道一著 思ひ出の山旅 著者
霧の旅 第十六年 四六―七號
登山とはいきんぐ 八、九月號
大村書店
地學雜誌 九、十月號 東京地學協會
登山とスキー 十月號 黎明社
山 同 梓書房
野鳥 同 集林書房
ケルン 同 朋文堂
山小屋 同 同
寫眞月報 十月號 小西六本店

觀光 同 山梨觀光協會
ツリースト 同
ジャパン・ツリースト・ビューロー
甲山峽水 同 山梨縣勝地協會
東京市山岳部年報 第二號
東京登山談話會報 岩田、村上、兩
君追悼號
しらかんば 記念號 都島山の會
泉ヶ嶽 第四號 七七銀行山の會
山と喜世留 第二號 其 會
せふり 九月號 福岡山の會
山 九月號 大阪三品俱樂部
東京みなかみ會報 九月號
尾ぜの會報 同
高嶺朝紅會報 同
東京山岳俱樂部報 同
魚市場山岳會報 同
かゝりび山岳會報 同
黒木立 十月號 關東山彦山岳會
武蔵山岳會報 九、十月號
峠の會報 同
奈良山岳會報 同
奥高尾山岳會報 九、十月號
東京山岳會報 同
關西山岳會報 同
關西山岳會報 同
京都山岳會報 同
M、R、C會報 同
臺灣山岳會報 同
關東旅行クラブ會報 十月號
東京旅行クラブ會報 同
東京アルカウ會報 同
日本アルカウ會報 同
橫濱山岳會報 同
東京山岳俱樂部報 同
日比谷山岳會報 十月號

登山會報 同
大阪探險俱樂部時報 同
廣島山岳會報 同
明峯山岳會報 同
山人會月報 同
名古屋山岳會報 同
日本登高會報 同
かぐれい會報 同
東京高嶺會報 同
東京市山岳部報 同
やま、第二六號 神戸高高山岳部
The Geographical Journal Aug.
/Sepe. 1935
The Mountaineer Sept. /Oct.
1935
Trail and Timbering Sept. /Oct.
1935
Sierra club Bulletin Aug. 1935
The Prairie club Bulletin Sept.
t. 1935
Appalachia Oct. 1935
Natural History Sept. /Oct.
1935
Die Alpen Sept. 1935
Bulet C. A. Catala Agost
/Sembre 1935
Unione Ligure Escursionisti
Agosto 1935
Planinski Vestnik 7-3 Stev.
Leto 1935
Revue d'Alpinisme C. A. Bel
ge 1935
Revue Alpine C. A. Français
Section Lyonnaise No. 301/
302 1935
Club Alpino Italiano Agosto/
Settembre 1935

購入圖書

C. G. Bruce: -
Himalayan wanderer 1934
E. Baumann: -
Meine Berge M.ine Kame
ra 1935
岡田武松著 氣象學 上下 二冊

會員寄贈圖書

地學寫眞 田中薫氏
文部省編 暴風講話 額田敏氏
四國香葉山脈登山案内地圖 吉永 虎馬氏
藤原咲平著 天文氣象の話 黒田 孝雄氏

山小屋新設

京都府愛宕郡鞍馬府字二瀬小字川野
管理、京都市立第二商業學校 森本 次男
大サ、二間、三間
名稱、希望京都北山麓杉莊
使用希望者は管理者へ照會の事

編輯後記

本會報も本號を以て五十號になりました。全號の總目錄も目下印刷中でありまして、皆様の製本に便ならんと考へてゐる次第であります。これからの皆様の援助により、一層内容の豊富なものにして行き度と思ひます。何卒宜敷、

昭和十年十月十五日印刷
昭和十年十月廿一日發行

發行所 東京市芝園寺中町 一
(木下屋敷)
日本山岳會

廣告一手取扱
電話・四谷・六五四番
印刷所印刷木多

HIKING SACK AND BERG SACK

ベルグサック

山行の快、不快を左右するものは一つに
リックサックの良否に依ります。
御撰擇に際しては背に致した防水の完全
な美津濃製を撰ぶ事が慣要です。

ベルグサック 至 3.50 至 8.50
サスペンダーサック 至 7.50

ハイキング

サック

特別な織布を以つて作られた見るからに
軽快なサックで、製作機構の合理化に見
事な品が豊富に取揃つて居ります。

インナーサックとしても好適です

至 2.50 至 3.50



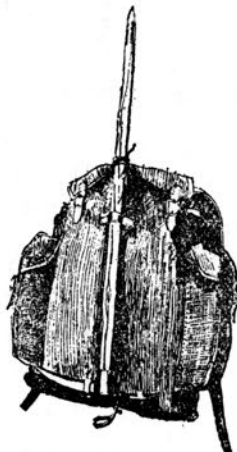
東京 神田 小川町

美津濃



☐ 片桐獨特の優秀なる布地にて冬期登山用天幕
及ツェルトザックの製作

☐ 白頭山遠征隊使用鐘紡布地にて天幕及ウインドヤツケ
の製作御引受け致します



ウインドヤツケ

A 至 4.50
B 5.00
C 8.00
D 6.00
E 12.00

羽根入シュラフザック

A 至 30.00(重量 550匁)
B 28.00(同 600匁)
C 20.00(同 750匁)
携帯用小型ルツクザツグ
A 至 2.50 B 3.00

キスリング型 ルツクザツグ

小型 至 6.00
中型 7.50
大型 8.50
特大 10.00

神田區神保町三丁目一番地
電話九段(3)三一六七番(呼出)

片桐 テント 登山 具 店
片桐 盛之助